

【奈良学園登美ヶ丘（幼稚園・小学校・中学校・高等学校） 平成28年度 学校経営計画（所属長方針） 自己評価書

項目ごとの評価（中・小項目とも）4段階評価 A：極めて達成度が高い B：概ね達成できている C：課題を残している D：課題が多く速やかな改善が必要

今年度の重点目標	具体的方策	評価		評価の観点・理由	課題及び改善
(1) 3+4-4-4体制のカリキュラム「奈良登美メソッド」の実践と検証	「3+4-4-4ルートマップ2016」及び小中高全学年の「シラバス」を保護者及び児童・生徒に配布すると共に、実情に合わせながら問題点の解決や3+4-4-4制の特色をより明確に提示できるように、教育課程部及びPP・P・M・Y各職員会議において検討する。	B	C	小中高全学年の「シラバス」の配布については予定通り達成できた。「3+4-4-4ルートマップ2016」については、小学校英語カリキュラム変更に伴い配布が遅れた。	教育課程部の定期的な開催が行えなかったことが大きな課題である。次年度においては定期的な開催と共に、各学年でできるだけ早く提示できるようにし、適宜点検及び見直しを行う。
	小中高において「教育課程特例校」の申請を行い、各校種がスムーズに繋がるような教育課程の編制に取り組む。	C		「教育課程特例校」の申請を検討したが、全体のカリキュラムについてではなく、教科単位での申請が必要であることが分かり、申請を行えなかった。	本校の特色としての英語を中心に、MiddleやYouth課程での算数・数学について「教育課程特例校」の申請を行う予定である。
(2) 幼小中内部進学の実践と検証	幼小内部進学委員会及び小中内部進学委員会において、内部進学者の進学後の実態把握と外部からの進学者との比較検討を行う。それを受けて、次年度内部進学に向けて、教職員・保護者・児童等にも周知徹底した上で、内部進学の実践的な作業に取り組む。	B	B	幼小及び小中それぞれの内部進学委員会を立ち上げ、計画通りに実施できた。また、教職員・保護者・児童等にもその都度状況を伝え、周知徹底できた。	幼から小への内部進学では進学率、小から中への内部進学では中入生とのレベル差を埋めることが課題である。小学校での教育内容の精選に取り組んでいく。
	それぞれ内部進学にふさわしい園児・児童の力を見極めながら、幼稚園から小学校への内部進学については70%以上、小学校から中学校への内部進学については80%の確保を達成することを目標にする。	B		幼から小への内部進学は39名中23名(59%)、小から中への内部進学は73名中65名(89%)となった。	幼から小への内部進学に課題を残している。説明会や小学校準備講座に加えて、普段の交流をより盛んにし、それを発信することで改善を図る。
(3) 特色ある教育活動の企画と実践	「3+4-4-4カリキュラム」作成と並行して、他校種との差別化を図りながら、各校種において特色ある教育活動を、年間を通じて企画・運営する。内容についても、昨年度に引き続き、全校を通じての体力作りや運動能力の向上、情操教育・理科教育・情報教育・英語教育の強化、幼稚園での2歳児保育・預かり保育の充実、小中高での国際理解教育・キャリア教育の充実等に重点を置く。	A	B	幼では、2歳児保育で若干数を減らしたが、次年度募集についてはその点を回復できた。また、「うきうきタイム」という時間を設け、体操やかけっこ・縄跳びなどの体力作りに取り組んだ。小では、放課後サッカースクールの実施、放課後預かりの検討などに取り組み、いずれも発展させることができた。中高では、中3生を中心に「スタディサプリ」を導入し、自学自習環境の改善に取り組んだ。	開校9年目になり、各校種共に行事として定着してきたことはよいが、それらの発展や改善の時期に入っているとも考えられる。次年度4月からの小学校放課後児童預かり開始のほか、各校種で新たな取り組みを行っていく。
	各校種において英語教育や国際交流活動に力を注ぎ、高校においてはスーパーグローバルハイスクール校の認定を目指して諸活動に取り組む。	C		小(ハワイ)・高(オーストラリア)での語学研修のほか、中高においては中国やオーストラリアからの生徒を本校に迎え、交流活動を行うことができた。	今年度には取り組みなかったが、高校におけるSGH校の認定については、次年度に部署を立ち上げ、具体的な検討を行う。
	高校の進路指導においては、70%以上の現役進学率を維持し、うち50%以上が難関を含む国立大学への進学を目標にする。そのための授業力の向上と補習・演習の取り組みを充実させる。	A		現役生104名中69名が進学(66%)、進学者のうち35名が国立大学への進学(51%)という結果になった。東大1、京大3、阪大4、神大6の現役合格を果たしている。	高2・3生に対して午後8時までの自習を認め、それに教員が対応できるようにしたことで、現役生の頑張りが可能になったと考えるが、この体制を維持していくための教員管理が課題である。
(4) 募集力の向上	昨年度以上に、各校種において、ニーズの分析を行い、志願者数増・定員の確保・レベルの向上を目指した広報活動及び入試を行う。特に、見学会・説明会・体験会等の内容の充実、本校行事の外部公開、ホームページの適宜更新、幼児教室や塾との良好な関係と情報交換、入試内容の検証・改善等に全校を挙げて取り組む。	B	B	幼の年少で41名(103%)、年中で3名の入園者があり、年中では55名(138%)の在園児となる。小では57名(63%)の入学者があり、90名の募集に対して今年度も大きく欠けることになった。中では174名(109%)の入学者があり、160名の募集を越える入学者となった。各校種共に広報イベントについては集客力も良く、積極的に本校をアピールできた。	幼及び中では定員を上回る入園入学者となり成果が出ているが、小で定員を下回っている。内部進学者の増加と私立小学校入学希望者を増加させる工夫が広報活動において求められている。少子化や景気の動向にも左右されることにもなるが、地道な広報活動と共に、新たな取り組みについて積極的にアピールし、広報イベントへの参加者増を図っていく。
(5) 教職員の資質向上	例年同様、日常における研究授業及び授業研究会の実施、本校の教育方針を理解・共有するための研修活動、他校種・他教科免許の取得の奨励、研究報告会や研究報告の作成、外部での研修参加や研究報告の実施等、年度を通して教職員の資質向上に努める。また、「3+4-4-4カリキュラム」の共有化のための合同研修会を継続実施する。特に、小学校においては、5月に西日本私小連研修会が予定されており、この成功に向けて全校体制で取り組む。	B	C	幼では、2月に就学前教育アドバイザーに来園いただき、公開保育と意見交換を行った。小では、5月に西日本私小連研修会の会場校として、1000名を越える参加者に対して本校の教育活動を公開した。特に各教科及び児童発表において高い評価を得た。中高では、10月に特別支援教育(県教研：森先生)についての研修会を実施した。合同研修では学校危機管理(奈良学園大学：松井先生)について取り組み、園児児童生徒の安全についての堅守会を行った。	各校種において教員による研修活動は積極的に行うことができているが、例年通りそれを情報共有できる場と時間を設けることができないのが課題である。無理に取ろうとすれば教員の日常業務や行事準備等に影響が出ることになる。現状では報告を回覧するのみに留まっている。今年度実施したような合同での研修会の回数を増やし、そこに意見交換ができる時間を設けながら情報の共有化を図っていく。また、幼小での公開保育または授業についても新たな取り組みを行っていく。

所属長方針

		「いじめの防止対策推進法」に基づいた「学校いじめ防止基本方針」に則った組織の編成及び防止対策に、保護者への啓発活動も含めて取り組んでいく。	C	今年度、いじめ問題の事象で、小1件、中1件について、県教育振興課に報告を行った。「学校いじめ防止基本方針」に則った組織が中心となって、これらの事象に対して教員間で情報を共有すると共に、その対応方法についても検討を行う機会を持った。ただし、保護者に対しては、都合上小学校の事象についての報告は行ったが、中学校のものはあえて広げることとはしなかった。また、保護者を対象にした啓発活動についても取り組むことはできなかった。	今年度起こった事象から考えた時、本校でのいじめ問題は保護者の関係の仕方によるところが多い。その点では、教員がそのことを理解し対応すると共に、保護者に対しても啓発活動を行うことが必要であると考え。保護者に対して、学校側からのいじめに対する考え方や取り組み方を説明すると共に、子育ての一環としての「いじめ問題」についての情報提供や啓発活動に取り組んでいくことが不可欠である。
(6) 校内施設設備の活用		幼小でのE黒板システムや中高でのAVモニター等を活用し、年度を通して、園児・児童・生徒に対する教育活動の充実を図る。	A	幼小でのE黒板システムや中高でのAVモニター等の活用については積極的に行うことができた。園児や児童もそれに慣れ、小では授業や発表活動において自ら積極的に使えるようになった。	幼小での活用は十分になされているが、中高においては、特にY棟での設置がないために不便をきたすことがある。設備の増加について、費用対効果を考えながら今後取り組んでいく。
		タブレット端末を導入し、小学校・中学校での授業や補助学習における活用重点を置く。	C	小でのタブレット端末導入は、限られた教科科目にはなるが活用できている。中高での補助学習としてのタブレット端末の活用については、家庭での学習が中心となるため、十分活用できているとは言えない。	タブレット端末を活用した授業の展開は現在人気を呼んでいるが、すべてが上手くいっている訳ではない。ハード面で現在クラス単位で取り組める体制を整えているが、それを活用するためのソフト面での準備と、指導する教員の研修や使用頻度が課題である。実験的な取り組みから始めていく。
		保護者や地域の方々にも利用していただく機会を設け、積極的に本校の活動をアピールする。	A	各学校行事についてはその都度保護者に案内し、積極的に参加していただいている。育友会活動や各校種の広報イベントについても同様である。校外の方についても合同行事への参加についてはホームページにて呼びかけている。	中学のキャリア教育の取り組みで行っているような保護者参加型の授業やイベントを行い、教育効果を高める取り組みを企画し実践していく。

【奈良学園（幼稚園・小学校・中学校・高等学校）】 平成28年度 学校経営計画（各学年の重点目標と具体的方策）自己評価書

項目ごとの評価（中・小項目とも）4段階評価 A：極めて達成度が高い B：概ね達成できている C：課題を残している D：課題が多く速やかな改善が必要

		【今年度の重点目標】	【具体的方策】	評価	評価の観点・理由	課題及び改善
各学年の重点目標と具体的方策	(1) Pre-Primary 1年 (年少)	ア. 教師や友だちに親しみ、ふれ合いながら一緒に遊ぶことを楽しむ。 イ. 園生活の流れや生活のし方がわかり、自分の身のまわりのことを自分でしようとする。 ウ. 自分の思いや要求を自分なりの言葉で伝えたり、いろいろな方法で表現したりしようとする。 エ. 身の回りの自然に興味をもち、触れ合うことを楽しむ。	ア. 教師との温かい触れ合いを大切にすると共に、好きな遊びを友だちと楽しむことができる環境の工夫をする。	B	遊んでいる様子から発見したことや思いを受け止め、遊びが広がるように援助した。教師も一緒に楽しみ、楽しさを共有することで友だちと遊びを楽しめるようになっていった。 自分でできたことを褒め、他の子にも知らせることで自信につながり、進んで取り組む姿が見られるようになった。 いろいろなことに興味を持ち楽しく取り組んでいた。「やりたい」という意欲を素直に表現することもできた。 自然に触れ、感じたことをクラスに広めることでより関心を持つことができた。学年での野菜栽培は、生長をまじかで見ることができ喜んだ。生き物の飼育環境を整えることができなかった。	子どもの思いや願いを大切にしながら、環境を整え工夫することに努めてきたが、整えすぎることもあった。今後はさらに理解を深める努力をしていく。 集中して取り組める時間に差があるので声掛けは必要である。 早期計画ができず、いろいろな活動を積極的に設けることはできなかった。次年度は早期計画、早期取り組みをしていく。 おたまじゃくし、かたつむりは飼育ケースで観察し、興味関心を持つことはできたが、その他の飼育物の環境を整えることができなかった。
			イ. 基本的な生活習慣については、教師も一緒にしながら自分で行うようとする気持ちを大切に、自分で行った時は大いに褒め、自信を持たせる。	A		
			ウ. 幼児の表現したい気持ちをわきたたせるような感動体験ができる場や機会を積極的に設けていく。	B		
			エ. 身近な自然に触れる機会を多く持ち、花や野菜などを実際に世話したり、生きものを飼育したりしながら、興味関心をもち、いたわりの気持ちが育つようにする。	C		
	(2) Pre-Primary 2年 (年中)	ア. 教師や友だちとのかかわりを深めながら、いろいろな活動に取り組む楽しさを味わう。 イ. 自分の思ったことや考えたことを言葉や様々な方法で表現する。 ウ. 生活の中で様々な自然に触れ、その美しさや不思議さなどに気付き遊びに取り入れる。 エ. 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。	ア. 好きな遊びや学級全体活動の中で、教師や友だちと十分にかかわりを持つ。	B	友達との関わりを喜び、遊びや様々な活動において教師や友達とふれあうことを喜び、一緒に遊ぶ事を楽しんだ。自己主張が強く、友達とうまく関われず、遊びの場から出ていく子もいた。教師が仲立ちとなって関わられるよう努めた。 自分の思いや感じたことを友だちや教師に伝えながら遊ぶ姿が見られた。興味や関心、発見など心が動いた体験を教師や友達に言葉で伝える機会を設けたり、絵画での表現活動につなげた。 恵まれた学園の環境の中で、園庭だけでなく、学内散歩に出かけ四季を通し自然にふれる機会を設けた。遊びの中で見て、触れて、心を動かしたことを遊びの中で生かすことができた。 10分間体育や体育の先生と遊ぶうで経験した事を、友達と一緒に楽しむ姿が見られた。体を動かすいろいろな運動的な遊びを楽しむ姿ができた。できたことを認めほめることに努めた。	友達関係が深まりとともに、子ども同士のトラブルがみられたが、教師が仲立ちとなって双方の思いを伝えるように努めた。今後も一人ひとりを大切に保育に努める。 自分の思いをなかなか出せない子どもに対して、安心して生活ができるように、寄り添い自信につなげていく配慮が必要である。 自然と十分にふれあういもてるよう、棚田の草花、園庭の栽培物の環境整備に努める。また、自然物を使って遊ぶ為のコーナーや、カップ、画用紙などの素材の準備等遊びの環境構成に配慮する。 教師も一緒に、体を動かす活動を楽しんだ。学級活動の中での運動的な遊び取り組みが少なかった。充実感を味わえるような工夫が必要。
			イ. 自分の思いや感じたことを友だちや教師の前でのびのびと表現できるよう、幼稚園生活はもとより、家庭や地域での様々な生活経験が具体的なイメージとして、一人一人の心の中に意識化していくような保育展開を心がける。	B		
			ウ. 園内の自然環境を整備し、地域の自然と触れ合う機会を設け、幼児が身近にかかわっていきける機会をつくっていく。	B		
			エ. 幼児の発達や興味に応じて、楽しんで運動に取り組める保育内容を工夫する。	B		
	(3) Pre-Primary 3年 (年長)	ア. 共通の目的に向かって、友だちと話し合ったり協力したり、工夫したりして自分たちで主体的に遊びや生活を進める。 イ. 自然や身近な事象への興味関心をもち、生活や遊びの中で感性を養い豊かに表現する。 ウ. 自分や友だちのよいところがわかり、互いの意見や行動を尊重し、認め合う。	ア. くりかえし試行錯誤ができる多様な体験の積み重ねができるような保育を展開する。また、仲間と情報を交流するといったことを通して、いろいろな物とのかかわりを楽しませ、興味関心を深めていけるような環境の構成をする。	A	子どもの思いや動きに寄り添い、やってみるために必要なヒントをしかけたり、材料を用意したりした。遊びのイメージを共有しながら1人ひとりがアイデアを出し合い、友だちの意見を受け入れながら遊びを創り出していた。 豊かな自然に触れ、友だちと感動を共有しながら新しい発見に興味関心が広がっていった。感動体験が表現する喜びにつながった。 1人ひとりの良さを認め広めることで、互いの良さを知り、自由な発想で友だちと話し合い認め合っていた。	子どもの気付きや発見に共感し、興味関心を深めていけるような時間や場の環境構成を整える。 今後も自然の中で様々な事象に出会い、友だちとともに感動体験することで表現する喜びを感じさせる。 友だちと互いに良さを認め合い、個々が自信を持って生活できるようにしていく。
			イ. 教師や友だちと感動を共有したり、伝え合うことを十分にしたりしながら、表現への意欲を高めていけるようにする。	A		
			ウ. 同じ遊びや課題に向き合って取り組んでいく中で、協力したり、話し合ったりする場面を大切に、友だちの気持ちを分かろうとし、思いやりの心がもてるようにする。	B		
	(4) Primary	《学習面》 ア. 聞く姿勢をしっかりと身につけ、自ら学	《学習面》 ア. 学習のルールを明確に示し、聞くことを大切に授業を行う。	B	B	学年開きの始め1か月でルールを徹底させることができた。

1年 (小1)	ぶ力を高めることのできる子どもを育てる。	イ. 学習の目当てや学習過程、及び評価が表現されているノート作りを通して積み上げる学習をさせていく。	B	全ての課題で、学習目標・学習計画・活動・評価が現れるノート作り・ワークシート作りができた。	第2学年においても同様のやり方で学習を継続させていく必要がある。	
	イ. 丁寧なノート指導を通して、積み上げる学習に取り組める子どもを育てる。	ウ. 話す力をつけることで、思考過程をまとめたり、他者の考えを受け入れたりする力をつけさせる。	B		日々のスピーチなどで、発表させる場を継続して持つことができた。	他者の考えを受けて、自分の意見を発展的に表現する技術を伸ばす必要がある。
	ウ. 話す力をつけ、積極的に学習に参加する子どもを育てる。	《生活面》 ア. 進んで気持ちのよいあいさつのできる子どもを育てる。	B		全ての教科において、自力解決していけるよう、ことばで発表する機会を多く作った。	発言頻度の低い児童が発表する意欲を高められるよう働きかける必要がある。
	イ. 考えて行動し、問題解決のできる子どもを育てる。	イ. 生活目標を軸に、挨拶・思いやりの心・登下校のマナーなどを実践させる。	C		挨拶や思いやりの心を学級活動を通して全員で高めていくことができた。	登下校マナーについては、継続してルール厳守を徹底指導していく必要がある。
(5) Primary 2年 (小2)	ウ. お互いを思いやり、クラス全体のことを考えられる子どもを育てる。	ウ. 保護者との連絡を密にし、学年通信や学級通信で説明責任を果たすことで、学校と家庭の相互理解を深めるようにする。	B	学級通信で授業内容などの説明責任を果たし、保護者ひとこと欄で保護者の交流の場を提供できた。		
	エ. 家庭との連携を図りながら、保護者と教師が共に育ち合える学級経営をめざす。					
	《学習面》 ア. 聞く姿勢をしっかりと身につけ、自ら学ぶ力を高めることのできる児童を育てる。	《学習面》 ア. 学習のルールをはっきり示し、聞くことを大切に授業を行う。	B	B	集中して聞く時、発言や話し合いをする時など、メリハリをつけた授業を行うことができた。	一部児童に、持続した集中や聞く姿勢が身につけさせられなかった。
	イ. 丁寧なノート指導を通して、学習の基本姿勢を身につける。	イ. 学習の振り返りや学習の気づきを書き表したノート作りを通して、自らの思考過程を確かめられるようにする。	B		ノートを基本とし、ワークシート・算数作文なども併用して、各自の気づき・考えを書き残すようにしてきた。	児童がさらに自主的に、気づきや思考をノートに綴っていけると良いと思われる。
	ウ. 進んで質問のできる児童を育てる。	ウ. 疑問を持ちながら課題や物事の本質に迫る理解を促し、分かる喜びを体感させる。	B		発問を工夫し、メタ認知が働くような問いかけをし、各自の中で理解できるようにしてきた。	教科や単元により、表面的な理解にとどまることもあった。
	《生活面》 ア. 進んで気持ちのよい挨拶ができる子を育てる。	《生活面》 ア. 生活目標を軸に、挨拶、返事、思いやりの心を育てる。	B		元気のよい声であいさつしたり、はっきりとした返事をしたりするよさを伝え、学年の雰囲気となるように取り組んだ。	今の雰囲気を継続させていきたい。
イ. 自らの行動を振り返り、善悪の判断ができる力を育てる。	イ. 問題の解決にあたり、自分を振り返りながら、どうあるべきかを自分の言葉で考えさせ、相手を思いやることの大切さを学ばせる。	B	トラブルが起きたときは、きちんと理由を考えさせたり、自分の心情を話させたりしてきた。		一部児童には、相手の気持ち考えさせることが難しかった。	
ウ. お互いを思いやり、クラス全体のことを考えて行動できる児童を育てる。	ウ. 報告・連絡・相談を心がけ、学年通信や学級通信などを通して児童や学級の様子を伝達しながら、保護者との信頼関係を構築する。	B	両クラスとも週一回学級通信を発行し、必要な事情については保護者へ連絡を入れるように努めてきた。		保護者の要求する水準に差があり、全ての要望をカバーするのは難しい面があった。	
エ. 家庭との連携を取りながら、保護者と教師がともに育ちあいのできる学級経営に努める。						
(6) Primary 3年 (小3)	《学習面》 自分の考えを自分の言葉で伝えられるように思考の過程を大切に、積み上げる学習のできる児童を育てる。	《学習面》 きめ細かな指導で、聞く、読む、書く、計算する等の基礎・基本的内容の確実な定着を図る。また、自分の思考過程が明らかになるよう、ノートやワークシート等に丁寧に記述させる。	A	B	毎日の授業や宿題等を通して右の4つの技能について指導してきた。特に授業の中で思考したことを記述させたり、終末において振り返りをワークシートに記述させたりすることで、メタ認知能力の育成に努めてきた。そのため殆どの児童が目標を達成できた。	本校の研究テーマにを重視し、きめ細かい指導を実施していきたいと考える。

		<p>《生活面》</p> <p>ア. プライマリー上級生であることに自覚を持ち、何事にも「めあて」をもって取り組ませ、正しい生活規範を身につけられるよう指導する。</p> <p>イ. 子どものよいところをたくさん見つけ、積極的に認めることのできる学年団を目指す。また、教師自らが子どもたちとともに成長していこうとする姿勢を見せ、はじめのある生活姿勢を身につけさせる。</p>	<p>《生活面》</p> <p>望ましい生活態度を明らかにし、教員間で共通理解を図る。学年会議を通して各児童の様子を共有し、課題を明らかにしながら、同じ視点で指導にあたる。</p>	B		<p>ア. 学期ごとの目標および当番活動や係活動にめあてをもって取り組ませた。そして互いに助け合うことのできるよう指導をおこなってきた。また児童の問題行動等については、毎週の学年会議を通して共通理解を図ることにより、正しい生活規範を概ねもつことができた。</p> <p>イ. 普段から子どもを褒めることを重視することで、児童同士が互いに認め合うことのできる雰囲気をつくることに留意した。それにより、学習と遊びのけじめが概ねできるようになってきた。</p>	<p>ア. 普段から「めあて」をもって行動させることは重要である。さらにそれが達成できたかどうか振り返らせることも、次の活動をおこなう上で必要である。こういった活動のPDCAサイクルを意識した指導ができるようにしていきたい。</p> <p>イ. 教師が子どもを褒める姿を見せることで、児童の自己肯定感が育まれる。今後も継続して行きたいと考える。</p>
(7) Primary 4年 (小4)	<p>《学習面》</p> <p>豊かな言語活動に重点を置いた学習を重視し、一人ひとりの子どもが、授業の中で自分の考えを発表し、深めたり高めたりして自分に自信がもてるよう指導する。</p>	<p>《学習面》</p> <p>国語科の学習をすべての基本と位置づけ、あらゆる教科（生活場面も含む）において「読む・聞く・書く・話す」などの活動を重視する。また、子どもたちが主体的に参加できる授業の形態、子どもたちの多様な意見を引き出す発問、すべての子どもたちにとって授業が安心できる学びの場となるよう授業改善を常に行う。</p>	B	B	<p>国語科におけるブックトークをはじめ、今年度は、奈良新聞の記者をゲストティーチャーとして新聞作りの基本を学び、年間を通して、成長新聞作りに取り組んだ。また、相互評価も行う中で、主体的、対話的な学びができ、他人の目を通して、自分の考えを再構築できるようになった。</p>	<p>課題としては、自分の考えをみんなの前で伝えることが苦手な児童に対してのフォロー態勢作りが必要。具体的には、事前に自分の考えを練る時間の確保と小グループでの交流活動などが考えられる。</p>	
	<p>《生活面》</p> <p>ア. プライマリー最高学年であることに自覚を持ち、一つひとつの行動に意識をむけさせることで、学習ルールを中心とした正しい生活規範を身につけられるよう指導する。</p> <p>イ. 返事や挨拶、言葉遣いなどについて、時と場に応じて使えるものとなるように、生徒指導面と学習指導面の両面から指導を心がける。</p>	<p>《生活面》</p> <p>ア. 「道徳の時間の指導の充実」「特色のある教育活動の充実」（稲作活動・縦割り活動・地域人材を活用した活動）「交流活動の充実」を図り、たくさんの人とかかわる中で、問題解決の方法を思考し、考えて行動する大切さを学ばせる。</p> <p>イ. 定期的な学年集会を実施し、課題対応に陥らない生徒指導をめざす。また、互いを尊重し、信頼で結ばれた成長し合う学習集団になるよう話し合い活動などを重視し、適切な言葉で相手に伝えられるように、また相手の発信をきちんと受け止められるよう指導する。</p>	A		<p>本物から学ぶ事をテーマに、米作りのプロや和紙作りの職人などの生活を通して、生き方を学ぶ活動を充実させることができた。活動を通して、自然の大きさや伝統を守る意味を実感することができた。</p>	<p>道徳の時間の充実を図るために、主体的に考えることのできる教材作りが必要。また、企画委員会を中心とした縦割り活動の充実を図り、PとMのつながりを意識していく。</p>	
(8) Middle 1年 (小5)	<p>《学習面》</p> <p>学ぶ喜びを体感し、学ぶことの楽しさを実感し、目標に向かって持続する強い心と成就感の持てる心を醸成する。</p>	<p>《学習面》</p> <p>各授業において、児童が自分の課題に対して言葉を軸に論理的に思考する場面を設定するとともに、児童間のコミュニケーション能力高め、自分の課題を解決できるように支援する。</p>	B	B	<p>ブックトークを初め、各教科において自分の意見を発信する授業が展開されたことにより、児童一人一人の思考する力は高まった。しかし、相手の意見が聞き入れられず、自分の課題解決に向けて行動できない児童が数名いる。</p>	<p>会話の中でも問いと答えが合わないことがあったり、単語で話したり、論理的に会話がなされていないことがある。今まで以上に教員が率先して、児童に対して言葉を大切に会話し、児童が論理的に思考できる場を作る。</p>	
	<p>《生活面》</p> <p>ア. 「メタ認知力」を育てることができる環境作りを行うことで、児童が自ら進んで行動し、実行するために、現在自分が置かれている状況を判断する力を身につける。</p> <p>イ. 学年全体で目配りしながら指導していることを保護者に知らせると共に、叡智ノートや電話などを通じて連絡を密に取り、保護者の信頼を得られるように努める。</p>	<p>ア. 児童自身が望ましい生活態度を考え、今大切にしなければならないこと正しく判断できるように支援する。教員間で児童の現状を正しく把握し、共通理解を図る。児童一人一人の課題を明らかにしながら、同じ視点で指導にあたる。</p> <p>イ. コミュニケーションの活性化を図り、豊かな人間関係と安心した学校生活を築くため、子ども同士はもとより、教員も率先して出会った人にあいさつをする。</p> <p>ウ. 教員は学校生活のすべての場面において、なかまを思いやり、支え合うことの大切さを伝えるとともに、生命がかげえのないものであることを伝え、自他の生命を尊重する心を育てる。</p>	B		<p>普段から教員間で児童の様子を共有し、児童の現状を把握できていた。児童一人一人の課題に対して、同じ視点で指導にあたったが、正しく判断できない児童が数名いたことが残念だった。</p> <p>多くの児童が、進んで挨拶ができていた。また、教員も児童だけでなく、来客に対しても挨拶し、その様子を見て児童も挨拶する機会が多く見られた。</p>	<p>引き続き、普段から児童の情報を共有し、学年全体で指導していく。正しく判断できない児童に対して、根気よく指導を続け、より良い判断力をつけるようにしていく。</p> <p>児童同士のあいさつはよく見られたが、来客に対して進んで挨拶できる児童が全員でない。教員がいないところでも来客に進んで挨拶できるようになってもらえるよう、今後も教員が児童の手本となるように率先してあいさつする。</p>	
			A		<p>学期が進む毎に、多くの児童に仲間を思いやる姿勢が見られた。友だちへの心ない発言も指導とともに無くなり、自他を尊重する様子も見られた。</p>	<p>学校生活において、人のために働く児童が多くいるので、その児童の行動にもっと目を向けさせて、今以上に支え合うことの大切さを気付かせたい。</p>	

			エ. 児童の心に報告・連絡・相談を心がけ、学校での様子を適宜保護者に伝えることで、保護者に安心感を与えられるようにする。	A		問題があっても児童としっかり話し合ったり、些細なことでも適宜保護者に連絡をとったりするなど、安心感を与えられるようになってきた。保護者からの苦情もほとんどなかった。	高学年になり家庭で反抗的な態度をとるなど、保護者が児童にどのように接しているかわからず、相談を受けたり、悩まれていることを耳にしたりすることが増えた。個人懇談だけでなく、普段から保護者に声をかけ相談しやすい環境を作る。
			オ. 学級力アンケートの実施とその結果をもとにした話し合い活動を行い、学級の課題改善を図る。	B		学級力アンケートの各項目について、客観的に答えることで学級の問題点を明確にさせた。児童一人一人がその課題に対して改善点を考え、話し合いができた。	改善に向けての課題を見つけ、クラスがより良い方向に向かうように努力は見られたが、長期間継続して取り組めなかった。話し合った内容は良いので、長期間継続して取り組めるようにこまめに評価をして長期間継続して学級の改善を図れるようにする。
(9) Middle 2年 (小6)	《学習面》 既習事項を基に自分の考えを持ち、学ぶよるこびを感じながら、さまざまな課題に自信を持って取り組める環境づくりを行う。	《学習面》 それぞれの授業において、児童が根拠にもとづいて論理的に思考する場面を意図的に設定するとともに、他者の意見をじっくり聴くことを通して、自分の意見と比較検討し、よりよい結論に到達できるような場面を設定する。	B	B	どの教科の指導においても、根拠を明確にして考えることを意識づけてきた。また、グループ学習の場面を意図的に設定し、他者の意見と比較しながら自分の考えをより深めるような授業展開を心がけた。	新学習指導要領の本格的な実施に向け、今後はさらなる「主体的・対話的・深い学び」が求められる。学習活動をさらに見直し、より思考力や表現力の高まる学習形態に改善していく必要がある。	
	《生活面》 ア. 児童が自ら進んで行動し実行するために、現在自分が置かれている状況を判断する力を育てることができる環境づくりを行う。 イ. 学年全体で動く機会を重視し、共に生活を送る仲間との間で、やさしさや思いやりをこえた“支え合い”が体験できる環境づくりを行う。	《生活面》 ア. 「叡智ノート」の指導を通して、現在だけでなく将来を見通す力を身につけさせるとともに、守るべきルールの上にも自由があることを知らせ、学校生活をより快適に送ることができるように支援する。 イ. 学級活動や行事、その他学校生活のあらゆる場面で、周囲へのやさしさや思いやりの大切さを説き、「支え合い」の必要性を児童に浸透させていく。そのために、まず「返事・挨拶・ことばづかい」の三つを重点的に指導していく。	C	B	日々の「叡智ノート」指導を通し、週や月の見直しをもって計画的に学習・生活に取り組むことができた。守るべきルールについては、学年全体での徹底が十分できたとは言いがたいため、このような評価とした。	特に小学校高学年程度の発達段階になると、注意を素直に聞き入れない態度の児童も出てくる。集団生活で守るべきことについて、一つひとつ納得をさせながら根気強く指導することが必要である。	
			B	B	学級や学年全体での活動の場を意識的に設定し、ともに支え合っている友だちや、自分を支えてくれている保護者の存在に目をむけさせた。「返事・挨拶・ことばづかい」は日々の生活の中でも指導を徹底してきた。	学校生活の最も基盤となるのは、児童が所属する学級である。学級の安定なくして、学校生活の安定はありえない。学校全体で重点項目の徹底を図りながら、よりよい環境を整えていきたい。	
(10) Middle 3年 (中1)	ア. 基本的な生活習慣を確立し、自主的な判断の下に行動し、社会的な役割を自覚するとともに、人権問題に真摯に取り組む精神を養う。 イ. 基本的な学習習慣を確立し、基礎学力の定着を図る。 ウ. 健康な体と心を育て、心身のバランスを保つ。	ア. ①挨拶を励行し、礼儀正しく他者を敬う態度を身につける。 ②学級活動・部活動・生徒会活動等を自主的にを行い、コミュニケーションスキルを高める。 ③道徳・特別活動の授業や、講演会等を通して、人権についての理解と認識を深める。	B	B	①～③全体に挨拶の大切さや、礼儀正しさを最初の段階であるハチ高原での研修で生活を共にしながら習慣付けさせたが、一年を通すと慣れから意識が薄くなっている。コミュニケーション能力はまだまだ幼く、友人や教員との距離感が分からない生徒も見られる。人権についての学習を通して認識を深めていけたと思う。	M3段階で修得すべき態度や自主的な活動を促せるように、更に新学年で定着を図っていきたい。	
		イ. ①「尚志ノート」を毎日提出し、生活習慣の確立を目指す。 ②朝テストを実施し、反復練習を通して基礎的な学力の定着を図る。 ③予習復習の習慣を定着する。	B		①～③尚志ノートの提出は各クラス徹底できていた。朝テストの意味を理解できていない生徒もいる。基礎的な学力の定着と反復することの大切さの徹底ができなかった。家庭学習の習慣としてすべてが繋がっていることを全体に徹底しきれなかった。	尚志ノートの提出の定着と生活習慣の点検、アドバイスなどを含めてM4生として学習面と生活面で安定していけるように指導していきたい。	
		ウ. ①部活動・体育的行事を通して、心身の健全な育成を図り、協調する心を育成する。 ②宿泊研修（ハチ高原宿泊オリエンテーション）で、集団における役割を自覚し、自主的且つ積極的な活動が出来るようにする。	B		①～②部活動への意欲は大変高い。先輩との交流で協調する心や学校としてのまとまりを図れていたと思う。宿泊研修での学年のまとまりはできていたが、そこで学んだことが学校で繁栄されていない。	他者との協調性と集団の中の自分の役割や、学校の中のM4学年としての自覚を育てていけるよう、更に指導をしていきたい。	

(11) Middle 4年 (中2)	ア. 基本的な生活習慣を確立し、正しい判断力と行動力を身につけ、周囲と協力し合える精神を養う。 イ. 自主的な計画に基づいて学習する習慣を身につけ、基礎学力の定着を図る。 ウ. 逞しい体と心を育て、心身のバランスを保つ。	ア. ①日々の教育活動から、決められたことを確実にする大切さを認識させる。 (登下校カードリーダー、尚志ノート、課題提出等を通して) ②挨拶を励行し、礼儀正しく相手に接することで、他者を敬う態度を身につけさせる。 (主に授業開始・終了、校舎内外の通行時、生徒間の挨拶を通して) ③学級活動・部活動・生徒会活動・宿泊研修等に積極的に取り組む意義を認識させ、リーダーシップや強調する心を育成する。				
		イ. ①日々の授業を中心とした学習の方法を身につけさせる。 ②朝テストを英語・数学・国語で実施し、基礎力の定着を図る。 (不合格者に対しては、放課後や家庭で課題、練習、やり直し等をさせる) ③与えられた課題に対する責任感をもたせ、期日までに提出する意識を高める。 (定期的に未提出課題を一覧にして保護者にも連絡し、家庭との連携を図る)				
		ウ. ①体育的行事、部活動に積極的に参加することを促し、心身の健全な育成を図る。 ②道徳の時間や講演会、日々の学校生活等を通して、生徒の実態に即して人権尊重の精神を育てる。				
(12) Youth 1年 (中3)	ア. 基本的な生活習慣を確立し、自主的な判断の下に行動でき、社会的な役割を自覚させる。 イ. 基本的な学習習慣を確立し、主体的に学習する姿勢がとれるようにさせる。 ウ. 健康な体と心を育て、心身のバランスを保つ。	ア. ①挨拶を励行し、礼儀正しく他者を敬う態度を身につける。 ②学級活動・部活動・生徒会活動等を自主的に行い、コミュニケーションスキルを高める。 ③徳・特別活動の授業や、講演会等を通して、平和、人権についての理解と認識を深める。 ④キャリア教育等を通じ、自身の進路について積極的に考える。 ⑤「仁智ノート」を毎日提出し、生活習慣の確立を目指す。	B	B	他者を敬うことができる生徒は多くなってきた。帰りの会時に行う1分間スピーチでは、クラス独自のテーマで実施し、成果を上げてくれたクラスもあった。キャリア教育での取り組みが有意義であった。「仁智ノート」の提出率が以前に比べ下がってきた。	「仁智ノート」の提出を促し、担任と生徒とのコミュニケーションが図れるようにする。 挨拶をすることによるオープンマインドの必要性を感じられるようにさせる。 キャリア教育の振り返りと進路指導につなげる。
		イ. ①朝礼テスト・終礼テスト、補習を実施し、基礎的な学力の定着を図る。 ②予習復習の習慣を定着させるとともに、課題への取り組みが継続的にできるようにする。	B		朝礼・終礼テストの継続が力になっている部分も大きいと思う。学習の定着ができずに、意欲に繋がらない生徒もいた。	朝、放課後の自主的な学習への取り組み。 授業に繋がる予習復習。
		ウ. ①部活動・体育的行事を通して、心身の健全な育成を図り、協調する心を育成する。 ②宿泊研修(沖縄宿泊研修)で、集団における役割を自覚し、自主的且つ積極的な活動が出来るようにする。	B		部活動では、生活のリズムがつくられ、学習も伸びている生徒もいたが、部活動をやめる生徒も数名居り残念だった。 沖縄では充実した研修ができた。	部活動と学習の両立ができるようにする。 イングリッシュキャンプの具体的な計画を早期に実施。
(13) Youth 2年 (高1)	ア. 将来を見据えた文理選択をさせる。 イ. 自律的な学習姿勢をつける。 ウ. 社会性を養う。	ア. ①HR等を利用し、自分の興味・適性を踏まえて、将来の職業や学問分野を考えさせる。 ②ネットやオープンキャンパス等を利用し、進路に関する情報を収集させる。 ③目標とする学部・学科を決めさせる。 ④個人面談を随時行う。	A	B	○HRで自分の興味・適性や、目指す職業・学問分野を踏まえ、志望学部・学科を考えさせたうえで、来年度の文理・科目選択をさせた。 ○大学についてネット等で調べさせ、オープンキャンパス参加を督促するとともに、京都大学については引率をした。 ○個人面談は頻繁に行えた。	○文理・科目選択については、最後まで迷っている生徒がいた。

		イ. ①具体的な進路目標を立てさせることで、学習意欲を喚起する。 ②自学を奨励し、仁智ノート等を利用して、計画的に学習を進めさせる。 ③定期考査や模試で、具体的な目標と対策を考えさせ、振り返りを奨励する。	B		○具体的な進路目標を立てさせた。 ○学習の進捗把握に、仁智ノートをよく活用できた。 ○模試については、対策と振り返りがよくできた。	○目標がどれだけ学習意欲に結び付いたかは追跡できていない。 ○定期考査で Y1 時のような「振り返りシート」を用意せず、自主的なチェックを奨励したが、個人差ができた。生徒によってはこまめなチェックが必要。
		ウ. ①挨拶、コミュニケーション、責任を果たすなどの、社会人としての基礎力を養う。 ②学級活動や学年活動で、生徒が役割を果たす場をできるだけつくる。 ③イングリッシュキャンプや、来年度オーストラリアの準備で、グループでの活動を多く行わせる。	B		○日常の学級・学年活動で、生徒の自主的な活動を奨励した。 ○イングリッシュキャンプや、オーストラリアプレゼンの準備で、グループでの活動を行わせ、よく協力させることができた。	○大きな行事等では、リーダーシップをとれる生徒があまり多くなく、生徒達だけでは協力しきれない場面もあった。教員の助言・援助がまだ必要である。
(14) Youth 3年 (高2)	ア. 将来の目標を実現するため、計画的・積極的な学習に取り組みせ、高い学力と科学的・論理的思考を育てる。 イ. 国際的な立場から世界と日本のつながりを実感させ、国際人としての的確な行動力と判断力を培い、思いやりの心と社会性を伸ばす。 ウ. 健康な体と強い心を育て、心身のバランスをとらせる。	ア. ①将来の具体的な目標を立てさせる。 ②大学のオープンキャンパス参加を奨励し、学部学科についての理解を深めさせる。 ③進路資料の利用を促進し、進学意識を高め、入試制度を研究させる。 ④模擬試験の有効な活用を考えさせる。 ⑤ライブラリー、自習室での自主的な学習活動を奨励する。	A	A	夏期休業等を利用し、積極的に大学見学を行う生徒が見受けられ、家庭でも積極的な話し合いが行われていた模様である。模擬試験の結果にも強い関心を示すようになってきた。自習室も居残り学習や、普段の自習などで多くの生徒が積極的かつ自主的に利用できるようになった。	入試制度などについては、まださしさまっていないこともあり、細部に至っては、まだ熟知していない生徒も多い。毎年入試制度が細かい部分で変更されることもあり、あまり早い段階で徹底できないのが実情でもある。来年度は細かく詰めていかなければならない。
		イ. ①正しい挨拶や端正な服装ができ、時間を守り、適切なコミュニケーションができるなど、社会人としての基本的な力を養う。 ②オーストラリア語学研修を通し、偏見や先入観なく、日本と世界の違いを素直に感じ、自己の可能性を広げさせる。 ③どのような場面に遭遇しても、落ち着いて行動できる精神力を身につけさせる。	A		ほとんどの生徒は指示をしなくても自主的にやるべきことを判断し、適切に行動できるようになった。オーストラリア語学研修を終えて、その体験が彼らを一回り大きく成長させたともいえ、語学研修の成果を感じさせた。	多くの生徒は大きく成長したが、また時間が守れず遅刻をしたり、幼い考え方をしたりする生徒も若干いる。各自の将来に向け、何が大切でどのようにすべきかを考え自ら行動できるよう指導していかなければならない。
		ウ. ①保護者と連携しながら、規則正しい生活習慣をつけさせ、自己管理をさせる。 ②様々な機会をとらえて、きめ細かな教育相談を行う。	B		心と体のバランスを崩す生徒も少なからずおり、そのケアができた生徒も多いが、最後までできなかった者もいる。また、隣にいる人の気持ちを考えて行動できる生徒も少しずつ増えてきた。	大学入試を控えて、ますます心のバランスを崩す生徒が増えてくることが予想でき、早い段階でのケアを心がけつつ見守っていきたい。
(15) Youth 4年 (高3)	ア. 自ら考え、自ら動く自主性を養う。 イ. 第一志望の大学に合格できる学力を培う。 ウ. 中高 6 年間のまとめにふさわしい充実した一年とする。	ア. ①自身の置かれた環境を最大限に活用する意識を高める。 ②教員主導の指導を控え、生徒自身に判断させることを意識する。 ③日々の生活を通じて、自主的に判断し行動する精神を養う。 ④日々の過ごし方が、自分自身のあり方を決めていくことを自覚させる。	B	A	多くの生徒が自身の将来について考え、その上で今、何が必要かを考え、実行することができていた。	志望校など自身の進路選択において、一貫性を欠いたりするなど、判断に甘さが見られる点もあった。保護者との連絡や進路に関する情報収集をより徹底することが必要である。
		イ. ①実力練成講座(始業前・放課後の補習)の実施 ②長期休暇中の講習の実施。本年度は特に冬期休暇において大学入試センター試験対策に特化した講習を実施する。 ③朝の SHR におけるリスニング・読書活動の実施。 ④自習室の延長利用等、生徒が主体的に学習できる環境を整える。	A		実力練成講座や長期休暇中の講習に多くの生徒が参加した。自習室は年間を通じて多くの生徒が利用した。これらを最大限に活用していた生徒が、塾などに通うことなく難関国公立大学に合格した。	全員が第一志望に合格することができなかった。Y4 学年になってから、ではなく、中長期的な展望を持って日々の学習を進めるよう促す必要がある。
		ウ. ①何ごとにも真摯な姿勢で取り組み、下級生の模範となるよう努める。 ②学習面に支障が出ない範囲で学校行事等に参加する。 ③学年やクラスでまとまることのできる活動を充実させる。 ④母校を愛する心を育む。	A		最終学年として、学年全体がよくまとまり、卒業式に向けて生徒間で色々な企画を考えて実行していた。自身の属した学年や学校に対する愛着も非常に強い学年であった。	本校の建学の精神や校是などをもう少しきちんと教える必要があったように感じる。LHR や学年集会などで M3 学年から浸透させていくべきである。